



時事評論 国土交通省のベビーカーマーク公表をめぐって：ドイツ、オーストリア、エクアドルの子育て環境との比較から

著者	荒川 麻里
雑誌名	教育制度研究紀要 = Research bulletin of educational organization
号	9
ページ	83-86
発行年	2014-07
その他のタイトル	"Stroller Friendly" Symbol in Japan : in Comparative Perspectives with Germany, Austria and Ecuador
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123059

国土交通省のベビーカーマーク公表をめぐって

— ドイツ、オーストリア、エクアドルの子育て環境との比較から —

荒 川 麻 里

はじめに ～ベビーカーマークとは？～

2014年3月26日、国土交通省は「公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会」の決定事項を公表した¹。中でも、制定された「ベビーカーマーク」について、各種メディアで報道された。右の図1が、そのマークである²。

上記の協議会は、ベビーカーを利用しやすい環境づくりに向けて協議するために2013年6月に設置され、計4回の会議が行われた。公表された「とりまとめ」³では、ベビーカー利用に関する諸課題を①安全性に関わること、②相互理解・配慮に関わることに大きく2つに区分している（7頁）。そして、「安全性」及び「理解・配慮」について普及啓発を図る「ベビーカー利用にあたってのお願い事項」と、その内容を視覚的に明示する「ベビーカー利用に配慮する統一的なマーク」について検討された（8頁）。

第1回会議の際に、すでに様々な調査結果が示された。各種調査では、公共交通機関におけるベビーカー利用者と一般利用者の意識の違いが一つの視点となっており、ここに協議会の前提とする問題があると推察できる。また、ベビーカーを利用する側にも、世代間の意識の違いがあることが示された。調査の中には、国際比較の報告もある⁴。日本、韓国、英国、フランス、ドイツ、スウェーデンの6ヶ国の都市圏の比較により、東京の公共交通機関におけるベビーカー利用意識の特徴として、次の3つが挙げられている。

- ① 混雑時に「ベビーカーを折りたたまずに乗車する」ことを不快・迷惑と感じる人の割合が高い。
- ② ベビーカーで移動する際に公共交通機関を利用する頻度が高いが、混雑時間帯を避ける割合が高く、公共交通機関でベビーカーを折りたたむ割合も比較的高い。



図1：ベビーカーマーク

〔出典〕国土交通省ウェブサイト
『ベビーカーマーク』について
<http://www.mlit.go.jp/common/001032706.pdf> (accessed 2014-4-20)

¹ 国土交通省ウェブサイト『公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会』決定事項の公表について http://www.mlit.go.jp/report/press/sogo09_hh_000083.html (accessed 2014-4-8)

² 公表されたマークは「案内図記号」（図1）と「禁止図記号」（案内図記号の枠内と同一デザインに赤色の斜線を引いて利用禁止を示したもの）の二つある。

³ 「公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会とりまとめ」
http://www.parlament.gv.at/PAKT/VHG/XXIV/J/J_05492/index.shtml (accessed 2014-4-8)

⁴ 第1回公共交通機関等におけるベビーカー利用に関する協議会（平成25年6月25日）資料5：大森宣暁「ベビーカーでの公共交通利用に対する意識の国際比較」

③ ベビーカーで公共交通機関利用時に周囲の乗客による助けが少ない。

東京都心の混雑状況はヨーロッパの都市とは比較にならない上にベビーカー利用率が高く、それを迷惑に感じる一般利用者が多い。この調査結果も、上記の利用者意識の違いの問題を裏付けるものとなっている。そこで協議会は、ベビーカー利用者と一般利用者の双方へのメッセージをこめた啓発ポスターを作成し、統一マークを提示したのであった。

ただし、「とりまとめ」がその冒頭で「子ども・子育てビジョン」(2010年1月29日閣議決定)⁵に触れ、「子どもと子育てを応援する社会」への転換に言及しているように、この問題は子育て環境整備の一環として取り組むべき課題である。そこでベビーカーマークに関連した、より積極的な子育て環境整備の例を紹介したい。

1. ドイツの列車内のマーク活用例と「駅ミッション」

ドイツの列車は優先席や優先スペース以外に、車いす、ベビーカー、自転車等の利用者のための専用車両が設けられていることが多い。通常は地下鉄でもボックス席タイプが多いが、専用車両は座席が横並びで、たたんで収納できるようになっている。図2は専用車両の例、図3がマーク活用例と設置されている固定ベルトである。自転車を車内に持ち込むことさえできるほどで、「ベビーカーを折りたたまずに乗車する」のは当たり前とも言える。利用環境は各列車によって異なるため、駅の専用機械やウェブサイトで経路検索をすると、専用車両の有無などが記載されている。同時に、乗り降りの手助けが必要な場合の連絡先として電話番号などが併記されていることも多い。



図2：専用車両の例（ドイツ）
(2014年4月 筆者撮影)



図3：列車内のマーク活用例と固定ベルト（ドイツ）
(2014年4月 筆者撮影)



それ以外に、駅を利用するあらゆる人の手助けをする「駅ミッション」(Bahnhofsmmission)が、ドイツ全体で100カ所以上に設置されている。1894年以来の歴史を持つ活動で、カトリックとプロテスタントが合同で行う公的な社会活動としては、最も古いものとされている⁶。実際に活動を行うのは専任のスタッフやボランティアで、構内の移動や列車の乗り降りなど駅利用全般の手助けをする他、

⁵ 「子ども・子育てビジョン」は、「少子化社会対策基本法」(平成15年法律第133号)7条の規定に基づく「大綱」として定められた。これに関連した情報については、次のポータルサイトが便利である。厚生労働省ウェブサイト「子ども・子育て支援：次世代育成支援対策全般」http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/jisedai/index.html (accessed 2014-4-8)

⁶ Bahnhofsmmission, Geschichte, <https://www.bahnhofsmmission.de/Geschichte.15.0.html> (accessed 2014-5-3)

幅広い援助活動を行っている。例えば、授乳の際の駅ミッション事務所スペースの提供、複数の子どもを連れている親にはベビーカーや荷物の運搬などの支援も行う。駅を利用する子どもたちがいつ立ち寄ってもよいように、事務所には絵本や簡単なおもちゃが用意されていることも多い。ミッションの活動は「子育て支援」を直接の目的とはしていないが、支援が必要な場合には誰に対してでも手を差し伸べてくれる心強い存在である。



図4：駅ミッションのマーク

〔出典〕 Bahnhofsmisson Website:
<https://www.bahnhofsmisson.de/>
(accessed 2014-5-3)

2. ドイツの駐車場のマーク活用例

次に、ドイツの駐車場におけるマーク活用例を紹介したい。南ドイツ、バーデン＝ヴュルテンベルク州にあるウルム市（Ulm）は、人口約11万8千人、面積約118 km²の地方都市である⁷。バイエルン州との境目、南ドイツの中央に位置することから、かつてより交通の要所として栄えた。ウルム市街には世界一高い塔を持つ大聖堂があり、国内外からの観光客も多い。その大聖堂の近くに、2006年の春にオープンした地下駐車場がある⁸。出入り口に最も近いところに障がい者優先スペースがあり、その並びにベビーカーマークの記された駐車スペースがある（図5参照）。通常よりも幅広く、またエレベーターまで段差なく通行できるようになっている。



図5：駐車場のベビーカーマーク（ドイツ）

（2014年5月 筆者撮影）



図6：駐車場の女性マーク（ドイツ）

（2014年5月 筆者撮影）

図6の「F」マークは女性（Frauen）優先を意味し、スペースは特別広くはないが、出入り口付近の見通しのよいところにかかなりの数が設けられている。女性が安心して地下駐車場を利用するための配慮であり、大きな照明も設置されて明るさも確保されている。ベビーカーを利用しない場合でも、子どもを連れている際には出入り口付近を利用できれば安全であり、女性マークは安心・安全な子育て環境の整備にもつながるものである。

⁷ 2014年3月に公表された統計データによる。Statistisches Bundesamt, Gemeindeverzeichnis, <https://www.destatis.de/DE/ZahlenFakten/LaenderRegionen/Regionales/Gemeindeverzeichnis/Administrativ/Archiv/Administrativ.html> (accessed 2014-5-3)

⁸ Stadt Ulm Online, Tiefgarage, http://www.ulm.de/leben_in_ulm/verkehr_umwelt/tiefgarage.4217.3076,3665,4373,4297,3533,4217.htm (accessed 2014-5-3)

3. オーストリアの「親子パーキング・チケット」の例

オーストリア、東チロル地方のリエンツ市（Lienz）は、人口約1万2千人、面積約471 km²、雄大な山岳地方に位置し、スキーや登山などの客で賑わう「太陽の町」（Sonnenstadt）である⁹。

リエンツ市では、「親子パーキング・チケット」（Eltern-/Kind-Parkkarte）制度が導入され、2010年1月に登録が開始された¹⁰（参照：図7）。2009年に市街地の駐車場が整備され、当時の市長が提案したことで同年に車両駐車規則の改正が行われた¹¹。チケット登録の該当者はリエンツ市在住の妊娠中あるいは2歳未満の子どもがいる女性で、市街の駐車場を120分まで無料で利用できる。該当者で自家用車のない場合には、市内タクシー・チケットを申し出ることにも可能である。

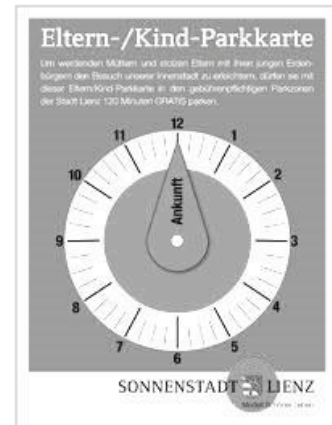


図7：親子パーキング・チケット（オーストリア）

〔出典〕 Stadt Lienz Website:

<http://www.stadt-lienz.at/system/web/zusatzseite.aspx?detailonr=220886569&menuonr=218265656> (accessed 2014-4-20)

おわりに ～エクアドルの子育ての情景から～

2013年11月に、筆者はエクアドルの首都キト（Quito）を訪問した。アンデス山脈の中腹に位置するキト市は、標高2,850m。到着後数日は高山病で寝込んでしまったが、10日間の滞在中、ベビーカーを目にしたのはたった一度であった。キト市街に住む友人も、ほとんど見たことがないと言う。当然、ベビーカーマークが利用されるはずがない。エクアドルの織物に施されるモチーフに、子どもを背負う母親の姿を模したものがある（図8参照）。エクアドルの日常で見かける、一般的な親子の姿である。いわゆる「おんぶ」だが、布で子どもをくるみ親の体に巻き付ける方法だ。子どもだけではなく、荷物を運ぶ際にも同様の方法が用いられている。2012年に滞在したカメルーンでは、赤ちゃんを頭の上に乗せてゆうゆうと歩いている母親を一度となく目にした。子育ての文化は様々である。



図8：母子の姿のモチーフ（エクアドル）

（2013年11月 筆者撮影）

今回、厚生労働省が問題としているのは、都会の混雑状況における子育ての困難さである。ユニセフの2012年版『世界子供白書』は、都市に生きる子どもをテーマとして、その環境の問題を指摘している。子どもの生きる環境が整わなければ、子育て環境の改善は困難である。その逆に、子育て環境は、子どものための環境整備によってかなり改善できると言える。すっかり定着している和製英語の「ベビーカー」と同様、日本式のベビーカーマークの理解が広まり、子育て・子育ての環境が改善されることを願いたい。

荒川 麻里（筑波大学人間系 助教）

⁹ 2014年チロル州の公表データによる。Amt der Tiroler Landesregierung, Lienz und Umgebung, <https://www.tirol.gv.at/statistik-budget/statistik/regionsprofile/plv36/> (accessed 2014-5-3)

¹⁰ 同制度については、リエンツ市ウェブサイトを参照。http://www.stadt-lienz.at/system/web/zusatzseite.aspx?detailonr=220886569&menuonr=218265656 (accessed 2014-5-3)

¹¹ Stadt Lienz Liebburg-Info, Nr. 53, S. 8. Kleine Zeitung, Hoffnung "Baby-Parken" in Lienz, 05.08.2009. <http://www.kleinezeitung.at/tirol/lienz/2095354/hoffnung-baby-parken.story> (accessed 2014-5-3)